

つつじ  
金子みすゞ

小山のうえに  
ひとりいて  
赤いつつじの  
蜜を吸う。

どこまで青い  
春のそら、  
私はちいさな  
蟻かしら。

あまいつつじの  
蜜を吸う、  
私はいくら  
蟻かしら。

公園、街中、さまざまなところでつつじの花が満開。とてもきれいです。

幼稚園でも、つつじの花の蜜を吸ったり、砂でつくったケーキの上にのせたり、水に入れてジュースを作ったり、その花をペットボトルにいれたり…と春の自然の中、子どもたちはそれぞれが楽しんで遊んでいます。お花や葉っぱでジュースを作ると、同じ花や葉っぱで作るのに濃い色、薄い色、いろいろな色のジュースができます。世の中にはなんとたくさんの色があるのでしょうか。

神さまのお創りになった世界はなんと美しいのでしょうか…

みすゞさんのつつじの詩の中にも色が出てきています。

新緑であろう小山、赤いつつじ、どこまでも続く包まれるような青い春の空、そして、蜜を吸う黒い蟻、自然界にはさまざまな色があり、自然界は実に不思議です。色があることによって春の情景が浮かびあがってくるようです。

みすゞさんはつつじに身を寄せたのでしょうか… そして自分は蟻に例えたのでしょうか…  
素晴らしい大いなる自然の中では 人間は蟻のように、なんと小さな存在なのかと感ずります。

